

## 「生まれいずる悩み」

上記は有島武郎の小説のタイトルである。かなり前に読んだことはあるが、本の中身より、このタイトルに引かれるものがあった。先日「どもり」のことを書いたが、私には幼い頃からもう一つ大きな悩みがあった。こちらは身体的なことだ。

幼い頃は病弱であり、危ないときが何回もあったという。小学校に入ってから背だけは伸びたが、手や足が細くひ弱な体格であった。でも草野球などが好きであり、勉強もせずよく遊んだ。そんな小学校時代の悩みが「どもり」とともに、手が曲がっていることだった。これは今も同じだが、両腕が真っすぐ伸びないのである。朝礼で「前にならえ」というのがあり、真っすぐ両手を伸ばさないといけない。自分では伸ばしているつもりでも、真っすぐに伸びず曲がってしまう。朝礼台のうえから、先生が私の方に向かって「真っすぐ伸ばせ」と怒られるときは、さすが辛かった。運動会の組み体操でも同じようなことがあったと記憶している。

中学や高校時代も、まわりは気にしていないようだが、こちらは気になることが多かった。とにかく半そでを着るのがいやであった。クラブ活動を選択する基準も、長袖が着れるかどうかであった。スポーツは好きなので、高校に入って選んだのが長袖がユニホームのハンドボール部であった。体力的に厳しかったが、「補欠の補欠」として1年間つづけた。高山から岐阜まで遠征して、ベンチを暖めたこともある。

こちらは「どもり」と違って、大学時代にも苦い「思い出」がある。大学に入学して、どのクラブに入るか迷ったが、結局は剣道部に所属することになった。剣道だと分厚い剣道着に身をつつんで立ち回れるからだ。初心者とはとにかく素振りばかりだが、真面目に声を張り上げてつづけた。2ヶ月ほど経ってから、クラブのコーチから、真っ直ぐ腕を伸ばすことができないのなら、剣道はやめたほうが良いという「指導」がなされた。こんな「指導」にショックを受けたが、たしかに上達は困難だと悟って退部した。

剣道部の退部を契機に、クラブ活動から遠ざかることにした。この頃から無性に本が読みたくなり、とにかく下宿にとじこもって読書に励んだ。「岩波 100 冊の本」をかたばっしから読んだり、岩波新書や内外の小説を読みふけた。ドイツ語にも興味があり、資本論などを読みはじめた。これが現在の私につながっているわけで、人生は不思議なものだと思うこの頃である。

(3月15日 記)